

## ガストン・フェビュスの『狩猟の書』後期写本にみる伝統と刷新 —ジュネーヴ図書館 Ms. fr. 169 を中心に—

高木麻紀子（東京藝術大学）

中世の秋、王侯貴族が絢爛たる独自の文化を成熟させてゆくなかで、娯楽を超えた嗜みとして重要視されたのが狩猟であり、14世紀のフランスでは狩猟概説書が相次いで成立した。なかでも14世紀末にフォワ伯ガストン・フェビュスが著した『狩猟の書』は、豪華な挿絵を伴う世俗装飾写本の代表作として知られている。ただし本作は、経験・自然主義的な内容が文学史の領域で評価されてきた一方で、美術史の領域では挿絵における新たな自然表現が注目されてきたものの、現存する46点の写本群全体に対する研究は乏しい状況にあった。そこで筆者は博士論文（2013年）において、挿絵入り写本（27点）のカタログを作成し、特に初期写本（1380-1420年頃）、中期写本（1440-70年頃）の代表作を、同時代のフランス絵画の流れの中に位置づけることを試みた。

後期写本（1470-1520年頃）に関しては、基本情報を把握する段階に留まっていたが、継続的な調査の結果、現存数や挿絵の質を鑑みると、この頃の『狩猟の書』制作の中心地は、フランスからフランドルへ移ったと言い得ることが判明した。そこで本発表では、後期写本を概観した上で、ブルゴーニュ公フィリップ善良公の廷臣ルイ・ド・ブリュージュの注文により1485年頃にブリュージュで制作された1冊（ジュネーヴ図書館 Ms. fr. 169: ジュネーヴ本）に注目する。なぜなら、後期写本を見渡すと、その多くが先行図像を踏襲していることが確認できるが、ジュネーヴ本、特に「序文挿絵」には、『狩猟の書』の図像伝統からの刮目すべき変化を看取し得るからである。この変容は、造形的観点からも制作背景からも一考に値し、『狩猟の書』の終焉の諸相を解明する鍵にもなると考えられる。

まず、ジュネーヴ本「序文挿絵」は、主要挿絵の周囲の余白に狩猟場面を散りばめるといった特異な頁構成を持つが、この形式に関しては、先例として15世紀前半のフランス制作の『狩猟の書』写本（ドレスデン、ザクセン州立図書館 Ms. oc. 61: ドレスデン本）を挙げるができる。ブルゴーニュ公家所蔵であったことが指摘されているこの写本の挿絵は、僅かに残された白黒写真でのみ知り得るが、仔細に観察するなら、ジュネーヴ本の頁構成の源泉であることが判明するだろう。

だが、ジュネーヴ本「序文挿絵」の主要挿絵における変容、特に『狩猟の書』の先行写本の定型的な風景表現とは異なる、個性を持った環境表現の登場は、ドレスデン本との関係からでは説明できない。その由来を探るため、同時代のフランドル絵画との関係、ブルゴーニュ公家の美術における風俗画的遊楽場面からの影響、という観点から考察を試みる。その結果、「序文挿絵」に見出された変容は、实景の導入という初期フランドル絵画の芸術的動向、ブルゴーニュ公家の宮廷美術を念頭に置いた注文主の要求、それらが交差したその中心に具現化したものとして認識できるだろう。